

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：32685

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19957

研究課題名(和文) 能楽オンライン稽古の(不)可能性に見る身体知の可能性

研究課題名(英文) Possibility of bodily skill throughout the (im)possibility of online teaching : the case of Noh dance

研究代表者

鑄物 美佳 (Imono, Mika)

明星大学・教育学部・准教授

研究者番号：50912052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：能楽仕舞のオンライン稽古がなぜ普及しにくいのかという問いを通して、稽古における身体知の伝達のあり方を考察することが本研究の目的であった。稽古の録画分析、ベンヤミンや井筒による哲学研究との接続を経て、研究成果として、「こう」としか指し示せないものの感性的了解が生じる様子を哲学の言語で記述することができた。成果は、論文3本(うち1本は刊行予定)、学会発表4回(国際学会2回、国内学会1回、研究会1回)の形で公にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、身体知の伝達にとって何がコアであるのかを、実際の伝達の現場に取材することで明らかにし、それを哲学の言語で分析することで、人間の感性的了解のあり方、身体知を通じた存在変様を描くことに成功した。その結果、理論に偏りがちな哲学研究においては、単なる身体一般ではなく、具体的身体(誰の身体であるか)を論じることを可能にした。また変化の過程を問うことで、個体的に考えることのできない生成変様を論じる視座を提供することができた。さらにより大きな文脈においては、COVID19が強要した大きな社会転換に対して、コミュニケーションとは何であるのかを哲学の議論として論じたことに社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This research aims to consider the learning process of bodily technique by posing this question: why is it so uncommon to give lessons on the bodily technique of Noh dance? Through video analysis and examining philosophical discourses such as Benjamin's and Izutsu's, the project has succeeded in describing by using philosophical terms, (1) there is something that can be designated only by the word "like this," and (2) this "like this" can be understood sensitively between a teacher and a disciple who share the same "now and here." The project has brought the following achievements: three articles and four oral presentations.

研究分野：哲学

キーワード：身体知 伝達 稽古 舞 能楽

1. 研究開始当初の背景 研究代表者の専門領域は哲学である。これまで人間の身体運動に関心を持ち、19世紀のフランス哲学や20世紀の日本哲学を研究してきた。

博士論文では、人間が自らの意志で自らの身体を動かす意志的な運動と習慣の関係を論じ、習慣のなかから意志的運動が立ち現れるさま、およびその哲学的意義を論じた。博士論文以降は、そのように動く身体具体性に迫るために、武芸における型稽古について研究してきた。稽古という事象を選んだ理由は、運動の習慣化と、習慣化のなかでも意志的な工夫をすることのどちらもが必要であり、その相互関係において人間の心身が変容しおいていくからである。また型稽古に限定することで、同じ動きの反復のなかでの深化、反復からうまれる創造性について考察することを狙った。

そのような背景のもと、身体知の伝達という場面に関心を寄せるようになった。稽古は必ず師弟間で行われ、師のもつわざがどのように弟子に伝わるのか(あるいは伝わらないのか)がその要に位置するからである。別様にいえば、弟子がどのように練習をするのかだけではなく、師匠と弟子とのあいだで生じる伝達を考慮に入れなければ、稽古という事象に肉薄することはできないのではないかと考えたからである。

ところで、研究開始当時、COVID-19の感染が世界的な懸念であった。あらゆる種類の対面が避けられ、できるだけ非接触が推奨されていた。稽古事の多くがオンライン稽古に切り替わった。そのなかで、能楽の舞の稽古は、ほとんどの場合において、オンラインにはならなかった。ここに、研究代表者は、稽古において対面でなければ伝えられない何かを考察するヒントがあると考えた。COVID-19という一時的な社会変動が偶然にも稽古の本質を炙り出し、それについて考察する機会が得られたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、オンライン稽古と対面稽古のちがいを出発点に、師から弟子へと伝えられる身体知とは何であり、またそれがどのように伝えられるのかを、能楽を例にとりて分析、考察することである。

3. 研究の方法

能楽の稽古を研究対象として設定した。2020年以来、研究代表者は、観世流の能楽師青木道喜先生に能楽の仕舞と謡の稽古を受けている。師の許可を得て、仕舞稽古の録画を分析した。稽古において、どのような言葉遣いと動作が見られるのか、またそれがなぜ対面でなければいけないのかを分析、考察した。

次に、分析結果をもとに、アリストテレスの「トデティ」、ベンヤミンの「アウラ」概念を参照しながら考察した。その際、稽古の分析結果を単なる哲学概念の例示として扱うのではなく、分析結果から得られるものを哲学概念に投げ返し、実践と理論の往復を意識的に行った。その結果、分析結果について考察するために既存の哲学概念では欠けている部分を発見した。それを補うために、同じテーマを有している井筒俊彦の言語哲学を参照しながら考察を深め、一応の結論に至った。

また適宜、研究会や学会発表、論文発表を行うことで、議論を重ねながら考察した。

4. 研究成果

研究の主な成果は次のとおりである。

稽古において伝達される重要事項のひとつに、「こ」系の指示詞でしか指し示せないものがあることを明らかにした。それは言語指示と運動の境目に位置するものであり、その意味を理解するためには師匠と弟子が同じリアリティを共有していることが必要不可欠であることが明らかになった。

また研究開始時には想定していなかったことであるが、「こ」系指示詞で主に指し示されているのは動きとイメージの照応であることが明らかになった。その結果、舞を舞たらしめるものとしてイメージの喚起が必要であることが、本研究を通して浮かび上がった。稽古を重ねてわざを身につけるといふことは、このイメージの喚起力を養うことであると定義することができる。

本研究の成果は、哲学概念の再検討を可能にただけでなく、これまで認知科学の分野で「わざ言語」をより広範囲で捉えることをも可能にした。「こ」系指示詞で指し示されたもののリアリティの共有は、今後めまぐるしく変わるであろうコミュニケーションのあり方にも一定の視座を与えることができると思われる。

また今後の展望としては、イメージの喚起には適切なリズムの産出が必要であることに注目し、リズム論として稽古を捉え直す予定である。舞におけるイメージは単発であってはならず、一曲を通して様々なイメージを展開させるリズムを含んでいなければならない。このことは本研究では十分に扱えなかった点である。およそ稽古に限らず、学ぶことは真似ることから始まる(「まねび」)。アリストテレスがミーメシス(真似ること)とミーメマ(真似た成果)

を区別して考察したことは示唆的であり、それを「ふるまい」として坂部恵が捉え直したことは学術的意義が深いと思われるが、まだ十分に考察されてきたとは言い難い。本研究の延長線上で、まねることとリズムを身につけること、そして身についたリズムの中で創造してゆくことを考えることができるにちがいない。それは、単に流れる時間でもなく、単に反復する時間でもない、抵抗をうちに含んだリズムという時間について、身体を含みおきながら考察することを可能にするだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鑄物美佳	4. 巻 71
2. 論文標題 型稽古の身体論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化学年報	6. 最初と最後の頁 213-237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Mika IMONO
2. 発表標題 How to teach bodily technique? Possibility of bodily skill throughout the (im)possibility of online teaching
3. 学会等名 European Network of Japanese Philosophy (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鑄物美佳
2. 発表標題 稽古する身体と「純粹経験」
3. 学会等名 西田哲学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Mika IMONO
2. 発表標題 Corps, danse, pratique et Kata
3. 学会等名 Le no et sa posterite dans les echanges et l'histoire de la scenographie: pratiques historiques et contemporaines; transplantations et fertilisations (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 稲賀 繁美 (編)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 434
3. 書名 蜘蛛の巣上の無明	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------